

1 緑の回廊 越後線

○ 面積

- ・ 16, 133. 39ha (国有林のみ)

○ 概要

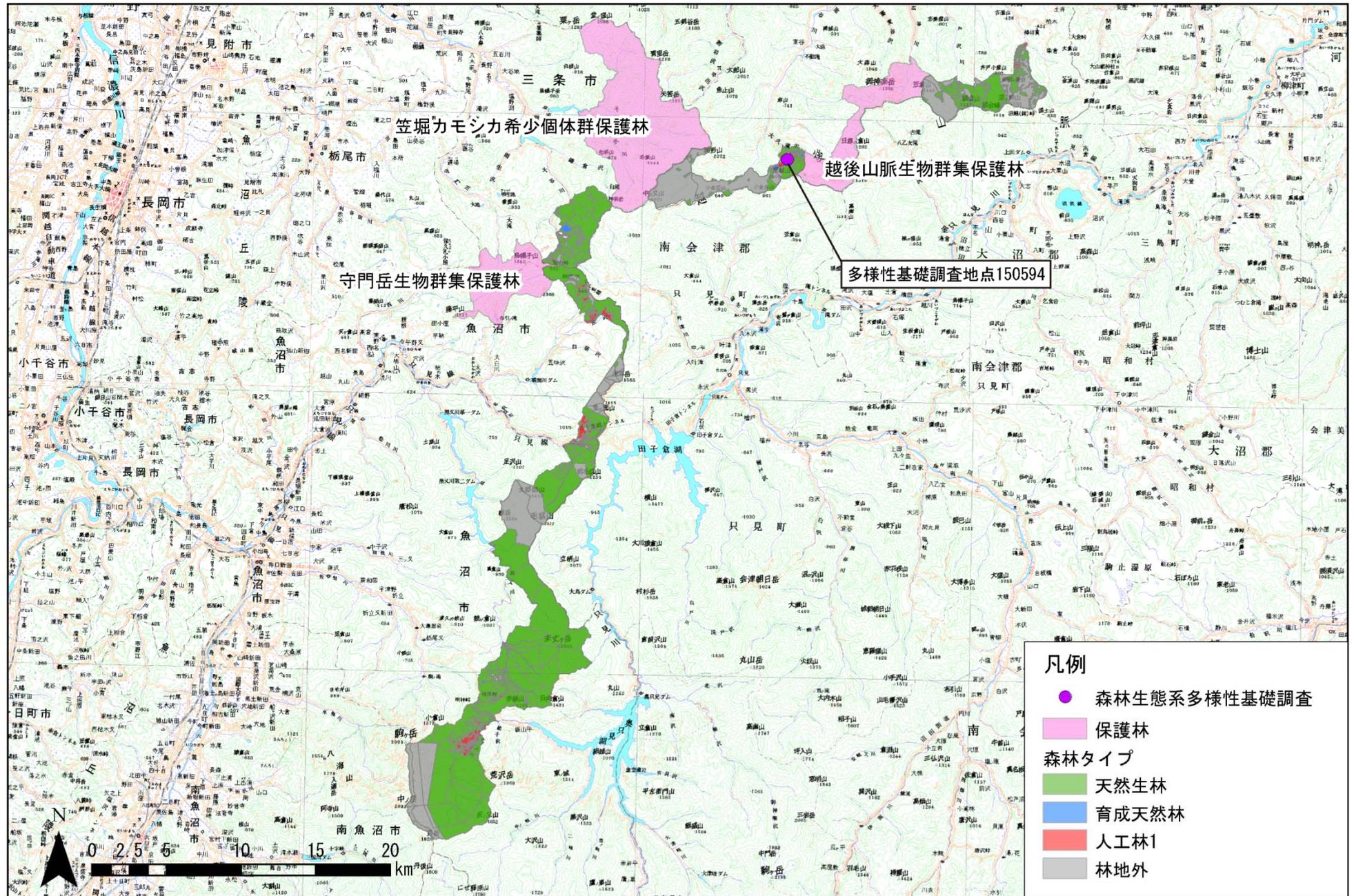
- ・ 緑の回廊越後線は、主に、福島県と新潟県の県境である越後山脈に沿って設定されている。
- ・ 周辺に設定されている保護林には、越後山脈生物群集保護林、笠堀カモシカ希少個体群保護林、守門岳生物群集保護林が存在する。
- ・ 回廊の総延長は約 76km にわたり、総面積は全て国有林で 16, 133. 39ha となる。

表 3-1 森林タイプの区分について

森林タイプ	区分方法
天然生林	「林種」が天然生林（「天」）の小班
育成天然林	「林種」が育成複層林（「複」）または育成単層林（「単」）で、「林種細分」が育成天然林（「育天」）の小班
人工林 1	「林種」が育成複層林（「複」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）の小班
	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）かつ「林齢」が 21 年生以上の小班
人工林 2	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）の小班
	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）かつ「林齢」が 20 年生以下の小班
林地外	上記の区分に該当しない小班

○ 参考データ

- ・ 森林調査簿
- ・ 聞き取り調査
- ・ 森林生態系多様性基礎調査 [林野庁] (プロット点数：1 ※第四期データを活用)
- ・ 自然環境保全基礎調査 [環境省]
- ・ モニタリングサイト 1000 [環境省] (該当サイトなし)



※電子地形図 20 万 (国土地理院) を加工して作成

図 3-1 緑の回廊 越後線

○森林タイプの分布状況

- ・森林面積は回廊の全面積 16,133.39ha の約 72%である 11,602.13ha、そのうち天然生林は 11,202.09ha (約 97%)、育成天然林 64.94ha (約 1%)、人工林 335.10ha (約 3%) である。
- ・森林の機能類型は、森林空間利用タイプ 198.62ha (約 2%)、自然維持タイプ 8,145.79ha (約 70%)、水源涵養タイプ 2,656.75ha (約 23%)、山地災害防止タイプ 600.97ha (約 5%) である。(林地面積 11,602.13ha を 100%として集計)

○樹木の生育状況

- ・森林簿を基にした林小班単位の主要林分(林相)は、広葉樹林 11,148.94ha (約 96%)、次いで針広混交林 285.29ha (約 2%)、針葉樹林が 167.9ha (約 1%) である。(林地面積を集計)
- ・林小班単位の林地面積から、主要な構成樹種をみると、ブナが最も多く 8,652.95ha (約 74%)、次いでヒメコマツ 1,750.20ha (約 15%)、スギ 889.86ha (約 8%) と続く。
- ・天然生林は、ブナが最も多く 8,639.67ha、次いでヒメコマツ 1,750.20ha、スギ 503.1ha と続く。
- ・ブナは、林齢 121 が最も広く分布し 7,473.25ha である。
- ・森林生態系多様性基礎調査では、第四期調査において回廊内の 1 地点で調査を実施している。本調査地点はブナ林である。ニホンジカの痕跡は確認されていなかった。

○下層植生の生育状況

- ・自然環境保全基礎調査〔環境省〕によると、今回廊内にはチシマザサ-ブナ群団の植生が広く分布し、このほか、ミズナラ-ブナ群落や、多雪の山地の急斜面、風衝地に自然低木群落が分布する。チシマザサ-ブナ群団の植生の下層には、ヒメモチ、エゾユズリハ、ユキツバキ、ハイイヌガヤ、ハイイヌツゲ等の常緑低木が多く生育する。特にユキツバキが群生することが多い。日本海要素の植物として、上述のハイイヌガヤ、ユキツバキ、ヒメモチ、エゾユズリハのほか、ヒメアオキ、オオバクロモジ等が生育することも特徴である。ミズナラ-ブナ群落の下層植生には、低木のユキツバキ、ヒメアオキ、ハイイヌツゲ、ウワミズザクラ、ヤマウルシ等が生育する。自然低木群落の下層植生には、アカソ、クロバナヒキオコシ、トリアシショウマ、ゼンマイ、スマレサイシン等のススキ草原の構成種や、つる植物が生育し、種数が多い。
- ・森林生態系多様性基礎調査による植生調査が実施された 1 地点では、低木層の植被率は 20~50%、草本層の植被率は 40~50%であった。



写真3-1 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 150594 (ブナ林)
下越森林計画区 撮影:2017/10/19



写真3-2 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 150594付近(ブナ林)
下越森林計画区 撮影:2019/12/1

○病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況

- ・森林生態系多様性基礎調査が実施された調査地1地点では、ニホンジカの痕跡は確認されていない。カモシカによる食痕が確認されている。
- ・森林概況調査の結果、ブナ林に隣接するスギ人工林で、クマ剥ぎによる被害が確認された。



写真3-3 森林生態系多様性基礎調査格子点ID：150594付近
クマ剥ぎの状況（スギ人工林）
下越森林計画区 撮影：2019/12/1

○野生生物の生息状況

- ・ツキノワグマ、ニホンザル、ニホンジカ、カモシカ等の生息が確認されている。
- ・中越森林管理署では、「イヌワシ等の保全を考慮した森林施業等の指針」を作成し、緑の回廊周辺ではイヌワシ、クマタカ等の生息状況の確認を行っている。
- ・下越森林管理署では、緑の回廊の周辺のスギに対するクマ剥ぎ被害が増加傾向にある。ニホンジカによる被害の報告は無いが、周辺のセンサーカメラによる調査で生息が確認されている。

○普及・啓発の実績

- ・ホームページによる保護林、緑の回廊の紹介。

○巡視の実施状況

- ・緑の回廊を目的とした定期的な巡視は実施していない。

○森林環境教育の場としての利用状況、学術論文

- ・特になし

○課題・評価等

- ・当回廊については、病虫害や深刻な鳥獣害が発生しておらず、健全な状態が維持されている。

2 富士山緑の回廊

○ 面積

- ・ 6,452.87ha（うち国有林 2,119.35ha）

○ 概要

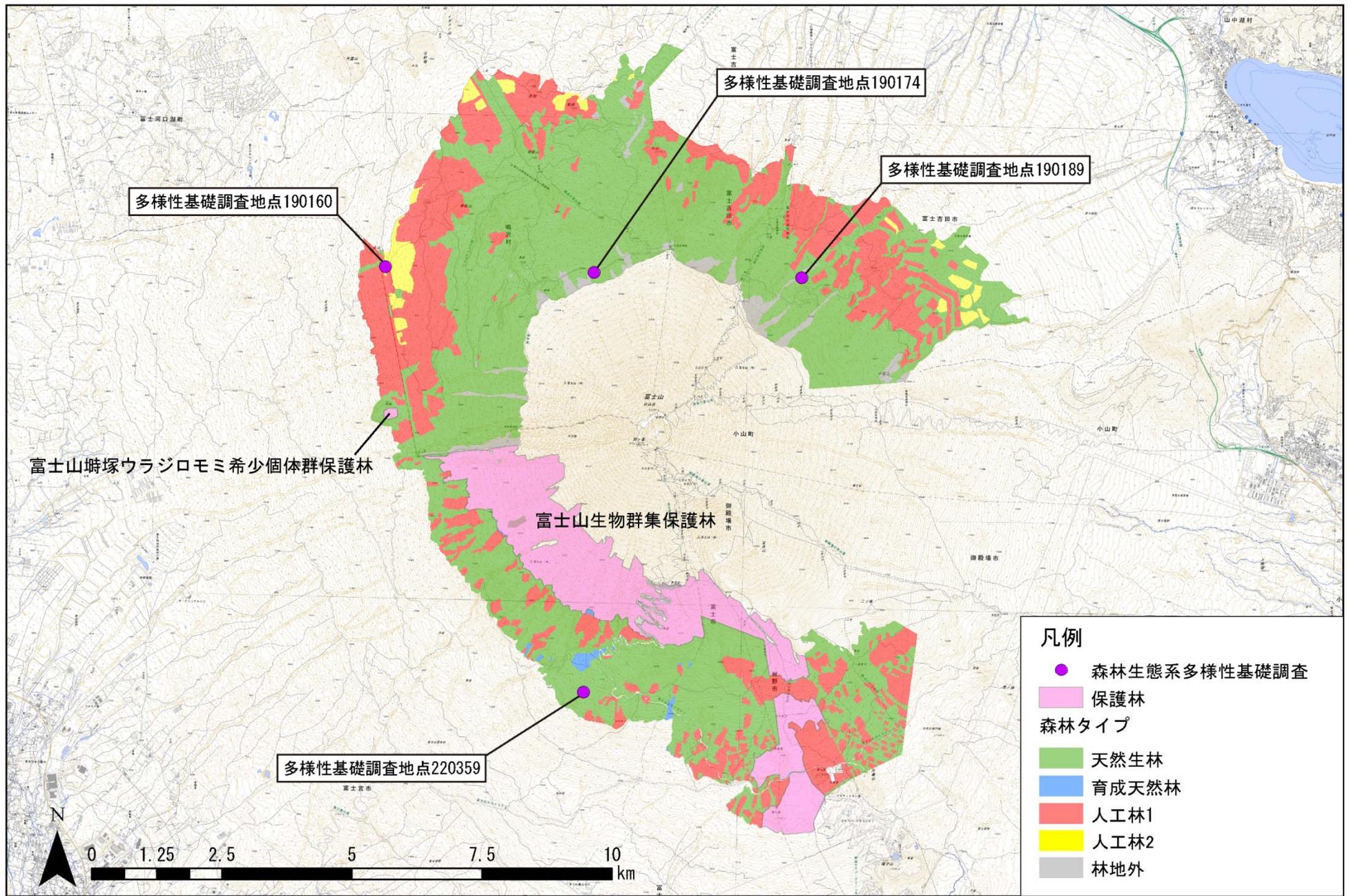
- ・ 富士山緑の回廊は、富士山の中腹部の標高 1,500m～2,500mをほぼ一周する形で設定されている。
- ・ 富士山エリアに設定されている保護林には、富士山生物群集保護林、富士山罅塚亜高山帯植物群落保護林が設定されている。
- ・ 回廊の総延長は約 24 km、総面積は 6,452.87ha となる（うち国有林 2,119.35ha）。

表 3-2 森林タイプの区分について

森林タイプ	区分方法
天然生林	「林種」が天然生林（「天」）の小班
育成天然林	「林種」が育成複層林（「複」）または育成単層林（「単」）で、「林種細分」が育成天然林（「育天」）の小班
人工林 1	「林種」が育成複層林（「複」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）の小班
	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）かつ「林齢」が 21 年生以上の小班
人工林 2	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）の小班
	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）かつ「林齢」が 20 年生以下の小班
林地外	上記の区分に該当しない小班

○ 参考データ

- ・ 森林調査簿
- ・ 聞き取り調査
- ・ 森林生態系多様性基礎調査 [林野庁]（プロット点数：4 ※第三期データを活用）
- ・ 自然環境保全基礎調査 [環境省]
- ・ モニタリングサイト 1000 [環境省]（該当サイトなし）



※電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成

図 3-2 富士山 緑の回廊

○森林タイプの分布状況

- ・森林面積は回廊の全面積 6,452.87ha の約 98%である 6,297.23ha、そのうち天然生林は 4,273.62ha (約 68%)、育成天然林 24.41ha (約 0.39%)、人工林 1,999.20ha (約 32%) である。
- ・森林の機能に関する指標は、国有林内においては機能類型で示されており、森林空間利用タイプ 840.07ha (約 40%)、自然維持タイプ 1,269.47ha (約 60%)、山地災害防止タイプ 9.73ha (約 0.46%) である (国有林の林地面積 2,119.27ha を 100%として集計)。山梨県内の民有林においては、市町村森林整備計画に基づくゾーニングとして設定されており、水源涵養機能 2,991.30ha (約 72%)、山地災害防止機能／土壌保全機能 3,750.17 (約 90%)、保健・レクリエーション、文化機能 1,236.56ha (約 30%)、木材等生産機能 3,343.24ha (約 80%)、指定なし 28.2ha (約 1%) である (山梨県内の民有林の林地面積 4,177.96ha を 100%として集計。なお、1つの小林班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。

○樹木の生育状況

- ・森林簿を基にした林小班単位の主要林分 (林相) は、針広混交林 3,486.56ha (約 55%)、次いで針葉樹林 2,436.70ha (約 39%)、広葉樹林 344.56ha (約 5%)、未立木地等 29.25ha (約 0.46%) である。(林地面積を集計)
- ・林小班単位の林地面積から、主要な構成樹種をみると、国有林ではウラジロモミが最も多く 1,064.22ha (約 50%)、次いでカラマツ 801.60ha (約 38%)、ヒノキ 73.97ha (約 3%)、と続く。民有林ではシラビソが最も多く 1,946.32ha (約 47%)、次いでカラマツ 1,042.22ha (約 25%)、コメツガ 774.88ha (約 19%) と続く。
- ・天然生林のみでは、国有林ではウラジロモミが最も多く 716.30ha、次いでカラマツ 478.72ha、その他広葉樹 48.62ha と続く。民有林ではシラビソが最も多く 1,077.60ha、次いでコメツガ 774.88ha、カラマツ 743.19ha である。
- ・国有林内の天然林ウラジロモミは、林齢 187 が最も広く分布し 132.93ha である。民有林の天然林シラビソは林齢 179 が最も広く分布し 578.62ha である。
- ・森林生態系多様性基礎調査では、第三期調査において回廊内の 4 地点で調査を実施している。各地点の植生は、コメツガ林、カラマツ林、シラビソ林、ダケカンバ林である。3 地点でニホンジカによる剥皮が確認されていた。

○下層植生の生育状況

- ・自然環境保全基礎調査[環境省]によると、今回廊には、シラビソ-オオシラビソ群集やカラマツ群落が広く分布し、やや低標高域にはカニコウモリ-ウラジロモミ群集、シラビソ植林がまとまって分布する。シラビソ-オオシラビソ群集の下層植生には、低木層にコヨウラクツツジ、オオバスノキ、ハリブキ、草本層にコフタバラン、コイチョウラン、カニコウモリ、シラネワラビ、セリバオウレン、ゴゼンタチバナ、タケシマラン、ハリガネカズラ等が生育する。カラマツ群落の下層植生には、シラビソ、カラマツ、タカネイバラ、ツバメオモト、ハコネコメツツジ、ミヤマアキノキリンソウ等が生育する。カニコウモリ-ウラジロモミ群集の下層植生には、カニコウモリ、シラネワラビ、ツバメオモト、イトスゲ、ミヤマイボタ等が生育する。

- ・森林生態系多様性基礎調査による植生調査が実施された地点では、ニホンジカによる食痕は確認されていない。植被率は、シカ痕跡が確認された箇所でも、草本層の植被率は50～95%と比較的高い。



写真3-4 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 190160 (カラマツ林)
山梨東部森林計画区 撮影:2013/11/6



写真3-5 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 190174 (ダケカンバ林)
山梨東部森林計画区 撮影:2013/10/8



写真3-6 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 190189 (シラビソ林)
山梨東部森林計画区 撮影:2013/11/8



写真3-7 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 220359 (コメツガ林)

富士森林計画区 撮影:2013/7/24



写真3-8 富士国有林人穴東地区(ウラジロモミ人工林)

富士森林計画区 撮影:2019/11/28

○病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況

- ・ニホンジカの生息密度が高く、極めて深刻な食害による更新阻害、及び樹木の枯損等が生じている。
- ・森林生態系多様性基礎調査の調査地2点（2015年調査）では、ニホンジカによる採食圧により、下層植生、低木層の消失が確認されている。
- ・森林概況調査では、ニホンジカの糞、足跡、シカ道、食痕、剥皮等が複数確認された。また、2019年台風19号による風倒木が確認された。
- ・静岡森林管理署では、緑の回廊を含む富士宮市を中心とした国有林で、ニホンジカ捕獲請負事業（忍び猟）を実施しており、富士山西側の人穴東地区では生息密度が5分の1程度まで低下している。
- ・山梨県では、緑の回廊を含む富士山周辺の県有林の広域で、剥皮や下層植生の消失が確認されている（平成22年「ニホンジカ影響把握事業」）。



写真3-9 富士国有林人穴東地区
ニホンジカの足跡とシカ道
富士森林計画区 撮影:2019/11/28



写真3-10 富士国有林人穴東地区
台風19号による風倒木
富士森林計画区 撮影:2019/11/28

○野生生物の生息状況

- ・ニホンジカ、ツキノワグマ、ヤマネ、ニホンリス、オコジョ等の生息が確認されている。

○普及・啓発の実績

- ・山梨県では、森林、林業に対する理解を深めてもらうための施設として、森林総合研究所に「森の学校」を併設している。また、学校の総合学習、市民講座等の生涯学習、各種団体での勉強会向けに、出前講座を実施している。
- ・静岡森林管理署主催による国有林見学会を、2017年まで実施していた。

○巡視の実施状況

- ・事業実施区域周辺を中心とした定期的な巡視に加え、富士山自然休養林保護管理運営協議会による登山道を中心とした巡視を合同で年1回実施している。（静岡森林管理署）

○森林環境教育の場としての利用状況、学術論文

・利用状況

静岡森林管理署では、植生保護のためのシカ柵設置を、地元の大学やNPOと協働で進めている。

・学術論文

西教生(2018) 富士山北麓山地帯の鳥類群集. 山階鳥学誌 50: 29-34

中村俊彦(2017) 日本中部亜高山帯林の遷移とコケ群落の動態. 蘚苔類研究 11(9): 247-259

岡秀一, 白川亜沙子, 菅野洋光(2015) 富士山北西斜面御庭付近のカラマツ低木林はなぜ維持されるのだろうか?-御中道巡りの魅力の再認識のために-. 地学雑誌 124(6): 1047-1060

○課題・評価等

- ・ニホンジカによる食害が顕著なエリアであり、ニホンジカによる採食圧により下層植生消失や樹木の枯損が確認されている。一方で、捕獲事業によりニホンジカの生息密度低下、植生の回復等が認められている地域もあることから、今後も緑の回廊への影響の変化に注視する必要がある。

3 丹沢緑の回廊

○ 面積

- ・ 8,394.40ha（うち国有林 3,593.76ha）

○ 概要

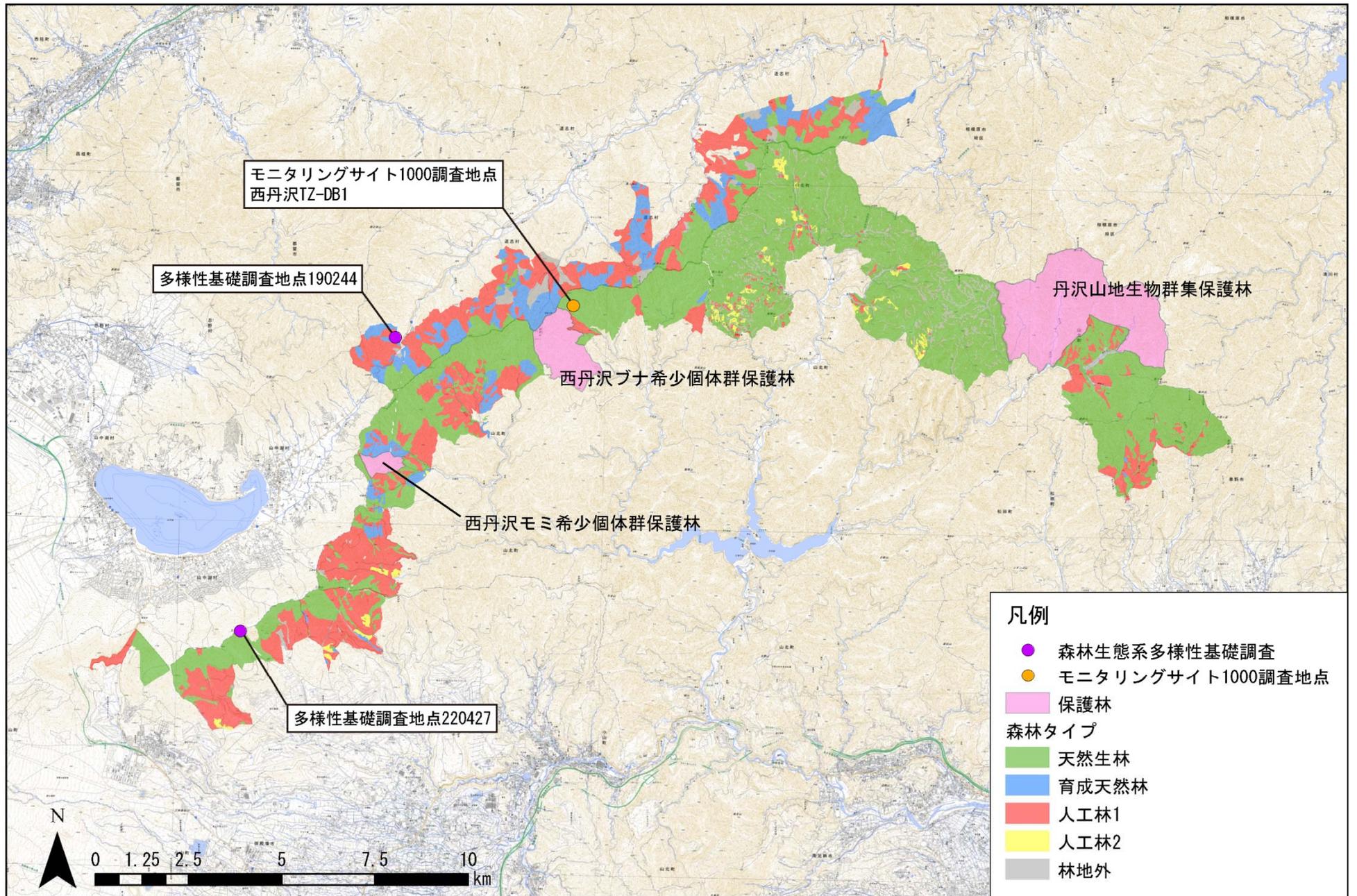
- ・ 丹沢緑の回廊は、標高 1,500m級の山並みが連なる丹沢山地から山梨県・静岡県と接する三国山、角取山までの区域に設定されている。
- ・ 丹沢エリアに設定されている保護林には、丹沢山地生物群集保護林、西丹沢ブナ希少個体群保護林、西丹沢モミ希少個体群保護林が設定されている。
- ・ 回廊の総延長は約 43 km、総面積は 8,394.40ha となる（うち国有林 3,593.76ha）。

表 3-3 森林タイプの区分について

森林タイプ	区分方法
天然生林	「林種」が天然生林（「天」）の小班
育成天然林	「林種」が育成複層林（「複」）または育成単層林（「単」）で、「林種細分」が育成天然林（「育天」）の小班
人工林 1	「林種」が育成複層林（「複」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）の小班
	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）かつ「林齢」が 21 年生以上の小班
人工林 2	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）の小班
	「林種」が育成単層林（「単」）かつ「林種細分」が育成天然林以外（「育天」以外）かつ「林齢」が 20 年生以下の小班
林地外	上記の区分に該当しない小班

○ 参考データ

- ・ 森林調査簿
- ・ 聞き取り調査
- ・ 森林生態系多様性基礎調査 [林野庁]（プロット点数：2 ※第三期、第四期データを活用）
- ・ 自然環境保全基礎調査 [環境省]
- ・ モニタリングサイト 1000 [環境省]（プロット点数：1）



※電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成

図 3-3 丹沢 緑の回廊

○森林タイプの分布状況

- ・森林面積は回廊の全面積 8,394.40ha の約 97%である 8,122.27ha、そのうち天然生林は 5,023.01ha (約 62%)、育成天然林 756.89ha (約 9%)、人工林 2,342.36ha (約 29%) である。
- ・森林の機能に関する指標は、国有林内においては機能類型で示されており、森林空間利用タイプ 1,046.12ha (約 29%)、自然維持タイプ 812.42ha (約 23%)、水源涵養タイプ 1,345.92ha (約 38%)、山地災害防止タイプ 372.89ha (約 10%) である (国有林の林地面積 3,577.35ha を 100%として集計)。静岡県内の民有林においては、市町村森林整備計画に基づくゾーニングとして設定されており、水源涵養機能 286.50ha (100%)、保健・レクリエーション、文化機能 108.83ha (約 38%)、木材等生産機能 58.11ha (約 20%) である (静岡県内の民有林の林地面積 286.5ha を 100%として集計。なお、1つの小林班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。山梨県内の民有林においても静岡県と同様、市町村森林整備計画に基づくゾーニングとして設定されており、水源涵養機能 1,920.57ha (100%)、保健・レクリエーション、文化機能 48.37ha (約 3%)、山地災害防止機能／土壌保全機能 996.91ha (約 52%) である (山梨県内の民有林の林地面積 1,920.57ha を 100%として集計。なお、1つの小林班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。神奈川県内の民有林では、林小班ごとに、市町村森林整備計画に基づく各ゾーニングが 3 段階の重要度で設定されていた。このため、各ゾーニングの重要度が中～高とされている林小班を集計した。その結果、水源涵養機能、山地災害防止機能／土壌保全機能、保健・レクリエーション、文化機能は民有林全面積である 2,337.85ha で重要度が高く設定され、木材等生産機能は 1,013.10ha (約 43%) で重要度が高く設定されていた (神奈川県内の民有林の林地面積 2,337.85ha を 100%として集計。なお、1つの小林班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。

○樹木の生育状況

- ・森林簿を基にした林小班単位の主要林分 (林相) は、広葉樹林 5,349.37ha (約 66%)、次いで針葉樹林 2,304.78ha (約 28%)、針広混交林が 458.71ha (約 6%)、未立木地等 9.41ha (約 0.12%) である。(林地面積を集計)
- ・林小班単位の林地面積から、主要な構成樹種をみると、国有林ではヒノキが最も多く 1,481.80ha (約 41%)、次いでモミ 753.99ha (約 21%)、スギ 547.39ha (約 15%) と続く。民有林では、広葉樹 (民有林においては細分されていない) が最も多く 3,435.97ha (約 76%)、次いでヒノキ 857.38ha (約 19%)、スギ 164.33ha (約 4%) と続く。
- ・天然生林のみでは、国有林ではモミが最も多く 710.98ha、次いでヒノキ 460.51ha、ブナ 456.76ha と続く。民有林では広葉樹が最も多く 2,808.93ha、それ以外は、ヒノキ 2.91ha、スギ、ヒノキ、マツ以外のその他針葉樹 30.69ha である。
- ・国有林内の天然林モミは、林齢 115 が最も広く分布し 431.66ha である。民有林内の広葉樹天然林は林齢 178 が最も広く分布し 251.79ha である。
- ・森林生態系多様性基礎調査では、第三期、第四期調査において回廊内の 2 地点で調査を実施している。各地点の植生は、アカシデ林、オオイタヤメイゲツ林である。2 地点とも、プロット内でのニホンジカの食痕が確認されていた。
- ・モニタリングサイト 1000 では、2018 年に回廊内の 1 地点で調査を実施している。本調査地点はブナ林

である。なお、モニタリングサイト1000の調査地点の一部は、自然保護上の理由等により正確な位置が非公開となっている。本調査地点も正確な緯度経度が記載されていないため、実際の位置は図中の位置から半径約0.5 km程度の範囲内となる。

○下層植生の生育状況

- ・自然環境保全基礎調査[環境省]によると、今回廊の西部には、スギ・ヒノキ・サワラ植林、ブナ-ヤマボウシ群集が広く分布する。スギ・ヒノキ・サワラ植林、特に適潤地のスギ植林の下層植生には、コアカソ、タマアジサイ、ニワトコ、ヤマアジサイ、ハナイカダといった好湿地性の低木や、ミヤマフユイチゴ、クサイチゴ、アケビ等が生育することが多い。ブナ-ヤマボウシ群集は太平洋側のブナ林で、林床にはスズタケが優占する。ブナ帯上部の林分では、マイヅルソウ、ヒロハツリバナ等の亜高山性針葉樹林との共通種もみられる。東部には、ブナ-ヤマボウシ群落のほか、アカシデ-イヌシデ群落や、大山の高標高地には岩角地・風衝地低木群落もみられる。アカシデ-イヌシデ群落の下層植生には、アブラチャン、クロモジ、ムラサキシキブ等が生育する。
- ・森林生態系多様性基礎調査による植生調査が実施された2地点では低木層は欠くことが多く、植被率は高い地点で40%であった。草本層の植被率は10%程度と低い。



写真3-11 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 190244 (アカシデ林)
山梨東部森林計画区 撮影:2013/10/8



写真3-12 森林生態系多様性基礎調査格子点ID : 220427 (オオイタヤメイゲツ林)
富士森林計画区 撮影:2013/10/8



写真3-13 西丹沢切通峠(神奈川県・山梨県境)付近(イヌブナ林・ヒノキ人工林)
神奈川県森林計画区 撮影:2019/11/27

○病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況

- ・回廊内にあるモニタリングサイト 1000 調査地点 1 地点では、タンナサワフタギにニホンシカのものと思われる樹皮剥ぎが確認されている。
- ・森林概況調査では、ニホンジカの糞、足跡、シカ道、食痕、剥皮等が複数確認された。また、ツキノワグマによるものと推測される樹皮剥ぎが確認された。
- ・東京神奈川森林管理署では、ニホンジカの生息密度が高く、全域で食害による更新阻害や樹木の枯損等が生じている。また、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害が増加傾向にある。



写真3-14 西丹沢切通峠(神奈川・山梨県境)付近
ニホンジカの足跡とシカ道
神奈川森林計画区 撮影:2019/11/27



写真3-15 西丹沢切通峠(神奈川・山梨県境)付近
ツキノワグマによるクマ剥ぎ
神奈川森林計画区 撮影:2019/11/27

○野生生物の生息状況

- ・ニホンザル、ニホンリス、ツキノワグマ、ニホンジカ、カモシカ、イノシシ等が生息する。

○普及・啓発の実績

- ・神奈川県では、秦野、西丹沢の2箇所にビジターセンターを設置し、地形、地質、動物、植物、歴史、公園利用などについて、展示・解説を行っている。また、公募制の自然教室、団体プログラムなどのプログラム企画、県内イベントへのPR ブース出展等を行っている。

○巡視の実施状況

- ・定期的な巡視は実施していないが、台風等の災害後には森林官による巡視を実施している。(東京神奈川森林管理署)
- ・ビジターセンターによる定期的な巡視を実施しており、ブログ等により情報発信を行っている。また、各山小屋からの情報についても集約し、情報発信を行っている。(神奈川県自然環境保全センター)

○森林環境教育の場としての利用状況、学術論文

・利用状況

秦野、西丹沢の両ビジターセンターを中心に、林間学校等で環境学習の場として利用されている。高校、大学の山岳部合宿の場としても利用されている。

・学術論文

高槻成紀, 梶谷敏夫(2019) 丹沢山地のシカの食性—長期的に強い採食圧を受けた生息地の事例—。保全生態学研究, Advance published

永田幸志(2019) 神奈川県におけるシカによる森林被害。日緑工誌, 44(3):475-478

佐藤司郎, 鈴木牧, 谷脇徹, 田村淳(2019) 丹沢山地におけるシカの増加がオサムシ科甲虫に及ぼす間接的影響。日林誌 100: 141-148

○課題・評価等

- ・ニホンジカによる食害が顕著なエリアであり、ニホンジカによる採食圧による下層植生消失や樹木の枯損が確認されている。また、ツキノワグマによる樹皮剥ぎも増加傾向にあり、今後短期間での被害拡大等変化が生じる可能性があることから、緑の回廊への影響に注視する必要がある。